

インターンシップを終えて

京都大学大学院 地球環境学舎 修士課程2年 西村 真帆

私の所属する京都大学大学院地球環境学舎では、実践性を重んじる教育方針からインターン研修を修士課程に取り入れており、学生は自分の研究テーマに合う機関にてインターンとして実地経験を積むことになっている。「持続可能な食料システム」をキーワードに現行の研究シーンや政策的観点のアプローチ、研究手法を学びたいと考えていた私は、食料・農林水産関係の政策研究機関である農林水産政策研究所での研修を希望した。思い切ってその門を叩いた（メールをお送りした）ところ、多大なご厚意により3か月間のインターンシップの機会をいただいた。大学卒業前に進学か就職かの進路で最後まで悩んでいたが、農林水産政策研究所でのインターンシップを終えた今、進学を選んで良かったのだと心から感じている。

学びと成長の機会に溢れた3か月間であった。生きものに配慮した米の生産・販売に関するアンケートの作成補助から食品関連企業のESGに関する開示情報の分析まで、分野も形態も様々な研究補助業務をやらせていただく中で、今後執筆する修士論文へのヒントを数多く得られた。また、所内の報告会や勉強会も、食料・農業を取り巻く国内外の動向についてリアルタイムで学ぶことができる貴重な機会であった。期間中何度も痛感したのは、長い間興味を持ってきたはずのこの分野での完全な知識不足であった。これまで表層的に理解しようとして、食料システム内のアクターに着目する視点が足りなかったことや、そもそも足元の日本の農業における制度等について知らないことだらけだったことに気づいた。未熟さに落胆こそしたが、その分日々の業務や勉強会で新しいことを覚え、それが次の業務で繋がっていくというプロセスを経て、自分の中で恒常的な成長を実感できた。

私がこの3か月間で得たものは、学術的な学びに限られない。人としての在り方も学ぶことができた。このインターンシップ中、業務の中で意見を求められる場面が多くあった。私はこんな一学生の意見で構わないのだろうか心配していたが、その心配は研究員の皆様によって払拭された。未熟な私の意見に、何万倍も豊富な知識と経験を身に付けておられる方々が真剣に興味深く耳を傾け、吸い上げ、

感謝さえして下さる。「実るほど 頭を垂れる 稲穂かな」―農を扱うこの研究所との親和性が高すぎるこの言葉がいつしか頭に浮かび、大切にしたいスローガンになった。私はこれからも学びを深め、世の中を良くしていけるような知識と経験を身に付けていきたい。同時にそれらにおおらず、周囲の言葉を大切にできる人間になりたい。無事大学院を卒業できたのちは、就職することになっている。いずれは後輩を持つような立場にもなるのだろう。その時、農林水産政策研究所で出会った方々と稲穂の句を思い出し、謙虚でおおらかな人間でありたいと思う。

インターンシップが終了してしばらく経ちこのレビュー原稿執筆についてご連絡をいただいた頃、ロシアによるウクライナ侵攻が始まり、連日テレビやスマートフォンで信じがたい現状が報道されていた。世界は混乱し、数日前まで普通に暮らしていた人々が、大人も子供も、どんどん犠牲になっていく。その様子を知れば知るほど、環境とか食料とか、今自分がやっていることは何の意味もないのではないかと無力感にさいなまれた。辛いニュースの連続に耐えられず心の痛みをインターンシップの指導責任者だった方にメールで打ち明けたところ、まずは自分ができることで最大限努力していこうと返事を下さった。求められた役割をまっとうすることが、良い組織運営に繋がり、健全な社会を作り、やがて巡り巡って世界を動かすことになるだろうと。この言葉で、私は改めて自分の役割を見つめなおした。食は人間の基盤だ。豊かな食から健全な社会を作る、それを将来世代にも繋げていけるような「持続可能な」方法で実現する。そうすることできっと平和な世界にできる。私の手の届く範囲からそれをやっという思いで、今後もこのテーマに向き合っていくつもりである。何より、私の尊敬するみなさんが今も同じ問題を前に日々奮闘されている、このことに勇気をもらっている。

最後に、新型コロナウイルスによる未曾有の難局にある中でインターンシップの要請を快諾し、それを最高の形で実現させて下さった農林水産政策研究所の皆様、心からの御礼を申し上げたい。